

# 桜見通信

2013 no.29(春待号)

題字♡marina

イラスト・詩♡えもとふゆ

sakurako tsu-shinn

また光の季節は訪れぬ

また光の季節は訪れぬ

「春はあけぼの やうやうしろくなりゆくやまぎわ・・・」とは古典文学の三大随筆の一つ、清少納言の「枕草子」の冒頭である。有名な一節であるため、教科書以外の場面でもしばしばお目にかかる文である。夜は漆黒の世界、次に群青から始まり、暁（あかつき）はやって来る。そして曙（あけぼの）、早朝（つとめて）と世界は赤みを帯び、真つ白の光につつまれ朝は目覚めるのだ。「死」から「生」へと時間は進む。生命の授受の儀式は繰り返される。季節であらわせば「玄冬」（黒色）から「青春」（青色）へバトンは渡されるのである。春は始まりの季節であり、冬の長い夜から解放される「自由」の季節でもある。まさに光が満ちあふれ風はささやき、ありとあらゆる生き物が活動を開始する「光の季節」であると言える。新しい命の発。生命の産声、「生（なま）の命」の歌を多くおさめた歌集に「万葉集」がある。

## 万葉集と「歌聖 人麻呂」

『万葉集』は日本に現存する最古の歌集である。この歌集は多くの謎を含んでいる。成立も編者も定かではなく、おおよそそのことしか分かっていない。現在は大伴家持（おおもものやかもち）が編者の中心とされている。家持の家財が没収された時に「万葉集」の原型の歌集を発見。平安時代に写本され「万葉集」として世に出たとされている。

その歌集名は「古今和歌集」紀貫之の「仮名序」に、「やまとつたは人の心をたねとしてよるつこの心はこそなれりける」とあるのを引いていると言われる。ただし、『古今集』の成立は『万葉集』よりも時代が下るのでこの語釈

が『万葉集』成立後にできあがったものという可能性も否定できず、そのまま『万葉集』の由来としてあてはめることには疑問もある。ほかにも、「未永く伝えられるべき歌集」とする説、葉をそのままの葉と解して「木の葉をもって歌にたとえた」とする説などもある。現在、主流になっているのは『古事記』の序文に「後葉（のちのよ）に流（つた）へむと欲ふ」とあるように、「葉」を「世」の意味にとり、「万世

にまで未永く伝えられるべき歌集」とする考え方である。四百五十首を数える「万葉集」を彩る歌人の中に家持の次に群を抜き、多くの歌が所収されている柿本人麻呂（かきのもと）とひとまろ）がいる。彼は「歌聖」と言われ抜群の光を放っている。彼自身も多くの謎を含み、その出自も晩年も謎に包まれている。彼の歌に

### 【東野炎 立所見而 反見為者 月西渡】

（ひむがしの野にかぎろひの立つみえてかへりみすれば月かたぶきぬ）という阿騎野（あきのの）冬獵歌なるものがある。阿騎野は宇陀市大宇陀にある。これは蕪村の「菜の花や月は東に日は西に」とよく並べられる歌である。（趣はずいぶん異なるが・・・）



また、先の皇位継承者の霊を呼び起こすために行われた呪的

儀礼。古来、歌を詠むことは「呪的」なものだとされていた。人麻呂がこの時歌ったのは「ひつぎ」の歌だったかもしれない。古代人が如何に「言葉」に対して「神妙」に向かい合ってきたかが偲ばれる。しかし、これは世界共通であろう。

### 【語句解説】

「かぎろひ」は「陽炎」——日の出の頃、空を茜色に染める光のことで曙光（しよこう）東雲（しののめ）の光のこと。ちなみに「ひむがしのの・・・」を英訳すると

On the eastern plain, the purple dawn is glowing.  
While looking back I see the moon declining to the west.

### うみなし 編集後記 雲舎寒九

長野県に白馬と言う高山植物の美しく咲く山があります。モグルスキー、オリンピック代表の上村愛子選手の故郷です。白馬大雪渓と呼ばれる、真夏でも3キロを越えて続く雪の大斜面がそびえる山です。地元の人や登山家たちは「はくば」とは呼ばず「しろうま」と呼びます。「はくば」の方がカッコいいような気がするのですが昔からの呼び名は「しろうま」です。一年中、雪のある山は「はくば」の名にふさわしく「白い馬」のイメージで僕はそう勝手に思っていました。ある意味それは正解だったのですが、「しろうま」は「苗代（なわしろ）を作る馬」からくる「しろうま」で春がやって来て雪が解けだし、山腹に馬の形があらわれるのです。雪が馬の形をして残ります。その白い馬が現れるときに稲作開始を告げるのです。人々は「しろうま」の登場を合図に「苗代馬」を使って田んぼを耕し始めます。地名の由来は調べてみるとなかなか面白い。本校近くの「あすか」もなかなか面白い。

『万葉集』に「飛ぶ鳥の」歌が数首ある。【飛鳥（とぶどり）の明日香の里を置きて去（い）なば君が辺は見えずかもあらむ】・【飛鳥の明日香の河の上ツ瀬に生（お）ふる玉藻は下ツ瀬に流れ触らふ玉藻なす】・【飛鳥の明日香の川の上ツ瀬に石橋渡し下ツ瀬に打橋渡す石橋に生ひ靡（なび）ける】など「飛鳥」を「飛ぶ鳥」と読ませ、「明日香」の枕詞として使っているようです。「あすか」の地に鳥類が多く飛んできたのではないかと。また「あすか」はサンスクリット語の「アソカ」が語源ともされ、「ア」は否定語で「ソカ」は悲しみ・憂いの意味から「悲しみのない無憂」の地という意味を持つとも言われている。ここにも地名の面白さが光る。



子曰く、弟子、入りては則ち孝、出でては則ち弟、謹みて信あり、

汎く衆を愛して仁に親しみ、行いて余力有らば則ち以て文を学べ。

( 学而第一 六 )

「しつわん、ていじく、いりてはすなわちじゆう、いでてはすなわちてい、つじみてしんあり、ひんくしゅうをあいして  
じんにしたしみ、おこないてよりみくあらばすなわちもってびんをまなべ。」

先生がいわれた。年少者の修養の道は、家庭にあつては父母に孝養をつくし、世間に出ては年長者に従順であることが、まず何よりも大切だ。この根本に出発して全てのことと言動をつつしみ、信義を守り、進んで広く衆人を愛し、とりわけ高德の人に親しむがいい。そして、そうしたことの実践にいそしみつつ、なお余力があるならば、詩書・礼・樂といったような学問に志すべきであらう。



学問を志す者(世に出て何かしたいと思う者)が大切にすべきはまず「礼儀」である。そこには「素直」な心があり、それなしには「上達」の道はない。……当たり前のことだけど、なにか「生意氣」な人が大きな顔をする時代です。全てのことに対して、謙虚に向かい合い(自分の小さなことを知り)多くの人の為にといい姿勢(思いやる心)をたいせつにしなれば、どんな学問も役には立ちません。逆に言うなら、自分のため(わがまま)の学問では何もできないということです。自分が「エラブル」ための勉強じゃなかってことか……な。